

# 都市と地方をかきまぜる

～関係人口が創る新しい地域社会～

(第40回地域政策研究セミナー)

一般社団法人 日本食べる通信リーグ・代表理事

特定非営利活動法人 東北開墾・代表理事 **高橋 博之**



(この原稿は講演をもとに当センターが文章にまとめたものです。)

## 1. はじめに

みなさん、はじめまして。

岩手県花巻市から来ました、高橋博之と申します。

私のやっていることは主に2つあって、「食べる通信」という食べ物付の雑誌と「ポケットマルシェ」というスマホのアプリです。両方とも共通しているのは、食を通じて生産者と消費者を繋げる、もっと広く言うと、食を通じて都市と地方を繋げる、かきまぜるという取り組みです。

今日は「関係人口」というお題をいただきました。「関係人口」の定義というのは、人それぞれあると思います。私は、東北を主に舞台として、これまで取り組んできた経験から思った「関係人口」についてお話ししたいと思います。

## 2. 「東北食べる通信」と震災

「東北食べる通信」というのは、食べ物付の情報誌です(図1)。16ページで、毎月特集を書いていて、約『東北食べる通信』とは

特集した生産者のつくる生産物が一緒に届く  
「食べもの付き情報誌」

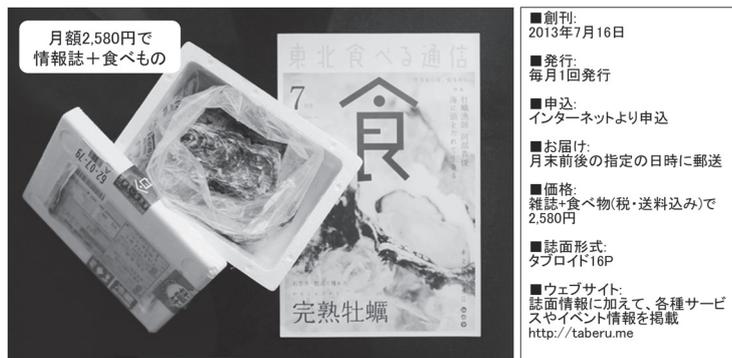


図1

8,000字、原稿用紙で20枚です。2013年の7月に創刊し、2018年7月で5年になります。50号程度書いてきたので、40万字、原稿用紙で1,000枚以上書いてきました。毎号1人の生産者とか1つの地域に焦点をあてて作りますが、1回訪問して半日話を聞いただけでは8,000字は書けません。それなりにお酒を飲んで、時には怒られながら、人間関係を作りながら書かないといけない字数なのです。

2月号で特集している南三陸の戸倉という港は、7年前に東日本大震災で壊滅したところです。今回は、その漁協の組合長の特集です。

この戸倉は、牡蠣の養殖をやっていますが、持続可能な漁法を採用しているということで、日本初のASC認証(国際認証)を取った所です。オリンピックでは、持続可能な漁法で獲れた物、農業も自然栽培とかオーガニックの物を選手村で食事として出していますが、東京オリンピックでは、国際認証をクリアした食材や、その基準に耐えられる農作物の食材を集めることが難しいという話も聞きます。

私が一昨年アメリカに行った時、アメリカのスーパーでは魚介類の販売コーナーが、赤、青、緑の3色に分かれていました。赤は持続可能な漁法で獲ったり育てたりした魚介類、青は真ん中ぐらいで、緑は全然配慮していない魚介類です。そして値段は手間がかかっている赤が一番高く緑が一番安くなっています。こういう売り方ができるのは、「ちゃんと持続可能な漁法で獲っている」ことを理解して買うお客さんがいるということです。日本においては、そんな売り方をしているスーパーを見たことがありません。オーガニックマーケットもヨーロッパほど広がっていません。これ

は最終的には消費者の意識、民度といってもいいかもしれませんが、「手間がかかるものはお金がかかる」ということを認めてお金を払う人が、日本は少ないということだと思います。

このASC認証をとるのは大変なのです。日本はご存知のとおり、乱獲を行い、護岸工事も大量に行い、海の環境はものすごく劣化しています。三陸には「津波でんでんこ」という伝承があります。揺れたら津波が来るから、人の事を構っていたら一緒に流されて人を助けられなくなるので、とにかく逃げろ、というのですが、震災後、これには続きがあると漁師に教えてもらったのです。それは「津波が引いたらすぐに海に戻れ」という伝承で、海が豊かになっていると言うのです。海底のヘドロや工業・生活排水とか、牡蠣やホタテを育てるために与えた栄養過多な物とか、そうした沈殿物が津波で全部陸に上げられて、海の中が綺麗になっているということなのです。震災後、三陸の漁村では、ホタテも牡蠣も3年で育つものが1年で育つという話を沢山聞きました。戸倉漁協の組合長も、海産物を育てる基礎生産力が震災後に高くなったとおっしゃっていました。そして、組合長は、自分たちが完全に自然を支配していると思っていたが、実はそれは傲慢であったと気付いたのです。

そこで、組合長は、これまでは海の基礎生産力を超えるような筏を並べ、筏と筏の間隔が10メートルぐらいしかなかったものを、3分の1に減らして間隔を40メートルに広げるという決断をしたわけです。筏の数が減らされますから、漁師は反対します。とにかくたくさん獲ることが大事で10年後のことまで考えないのです。しかし、組合長はいろいろな嫌がらせを受ける中でそれをやり抜きました。やり抜くことができた理由は、震災で、昨日まで冗談を言い合っていた人が海にのまれていなくなってしまったからです。そういう惨しい死がその集落にもありました。「人生には締切がある」、「明日は来るものだと思っていたが必ずしも明日が来るとは限らない」という当たり前のことに気付かせてもらった。そうである以上、漫然と生きるのではなく、次の世代に繋がることを自分たちの代でやらねばならないという信念を持てたからだと言っていました。そうして日本初のASC認証の取得をやったのです。

そういったことを8,000字にまとめて、その牡蠣の物

語と共に、牡蠣を付けてお届けするというのが「食べる通信」の事業です。

### 3. 人間と自然との関わり

この組合長の話は、結局、自然なのです。圧倒的な自然が自分たちの真横にあったということを忘れていた。毎日海と向き合っている漁師ですらこうですから、海あるいは山から離れた都市生活者は無論のことでしょう。これは何も東京大阪で生きる人だけではありません。私は岩手の花巻出身ですが、花巻のような人口10万人の地方都市の人も、大半が、海と土から離れて、車で会社に通って1日中パソコンの前で仕事をして、そのまま帰るといような、程度の差はあれ都市生活者のような生活をしています。

私は、日本人として、あの震災から何を教訓として得たのかをやはり考えなければいけないと思っています。自然からこれ以上離れてはダメだと言うことを、7年前私たちは学んだはずですが、けれども元の木阿弥ではないですが、再び自然から離れて暮らしている人たちが、私自身も含めて非常に多いと思います。

農業・漁業の生産者は日本の全人口の3%だといいます。私は1974年生まれですが、私が生まれる少し前は、この国に農家が1,000万人以上いたのです。10人に1人です。それが今では200万人を切りました。更に問題なのは40歳以下の若い農家が17万人を切っていることです。右肩下がりです。40歳以下の漁師に至っては2万人を切っています。すごい勢いで海と土から離れて都市に生活しているという事です。

私たちにとっての最も身近な自然はこの身体です。人間は生まれれば老いて病気になって死にます。この最も身近なことからいつの間にか目を背けて正視しなくなってしまいました。どうして年を取るのが悪いのでしょうか。高齢化社会と言うとなんだかお荷物の年寄りが増えて大変な世の中みたいなニュアンスで言われています。皆さん全員年をとります。そして、世界に冠たる医療制度を作って、貧富の差に関わらず病気は早期に治って死が遠くなりました。

また、赤ん坊が生まれたり年寄りが死ぬことは、今はほとんど病院か施設での出来事ですから、日常生活の中に生と死を感じられる場面が、昔に比べてものすごく

減っています。とにかく生老病死という自然から離れてしまっています。

食べることにしてもそうです。生き物は食べないと生きていきません。私たちが普段食べている食べ物はすべて動植物の死骸です。ところが今、都市では、スーパーに行けばきれいに包装された過剰なまでの加工品、そしてレストランや居酒屋に行けばきれいに皿に盛り付けられた食事を食べられます。もともとは動植物の命だった、感謝して食べなきゃいけない、命をいただきます、こんなふうにして手合わせている人いますか。

食事がどうなっているのかというと、私は工業的な食事と言っています。まるで車にガソリンを給油するように食事をしている。ゼリー状の10秒チャージとかがあります。私もだいぶお世話になった1人ですけども、食べるってそういうことだったのでしょうか。そうじゃなかったはずですよ。食べたり排泄したりするという行為は生き物として自然な行為なのにこれらもどんどん工業化しているということです。

皆さんのポケットの中にスマホが入っていると思います。そのスマホの中に Siri と言う人工知能 (AI) が入っています。喋ると答えてくれるやつです。その Siri を開発したレイ・カーツワイルという人がいて、今 Google の人工知能開発のトップをやっています。彼は、「先進国の人間がいつまでそんな食べるという煩わしい野蛮なことをやっているのか」と公言しています。家に帰ったらナノロボットを体の中に入れて、その人に必要な栄養素を無線 LAN で飛ばし、後は必要な栄養を注ぎ込めば食事完了、こんなに楽で良い食事はないじゃないか。時々寿司も食いたいと思った時は、VR (バーチャルリアリティ) のゴーグルをつけて専用サプリメントを食べれば、高級な寿司屋で寿司を食べているかのようなリアリティを味わえるじゃないか、と言っていて、ものすごい勢いでこの分野の研究開発が進んでいます。

そして現実を見てください。工業的な食事が広がっています。私も食事の7割位は工業的な食事です。それは忙しいからで、つまり煩わしいと思ってしまうわけですよ。レイ・カーツワイルが言っているような社会にもものすごい勢いで向かっているのです。そして極めつけは、死とも戦うと言っています。私は、生き物は最後死ぬ、これは絶対的な真理だと言ってきました。ところが

レイ・カーツワイルだけではなくて、世界的な経営者のイーロン・マスクとか、日本でいえばホリエモンとかも、なぜ死を受け入れなきゃいけないのか、この絶対的な真理と徹底して戦うと言っています。どういうことかという、脳の中をインターネット上にアップロードすれば、意識も記憶も自我も残すことができるはずだということです。人体は滅びるかもしれないけれども、ミニチュアのフィギュアみたいなものと接続したら、生きられるじゃないか、永遠の命を手にするじゃないかと生物の進化そのものをひっくり返すようなことを平気で言っています。私は結論から言うと嫌いなんだけど、そちらにもものすごい勢いで向かっている。

#### 4. 都市化がもたらす自然との距離

日本に話を戻しますが、去年の暮れに東京の大学生に講演をした時、有名な私立大学の学生が手をあげて、高橋さんの言う事は分かったけれども、なぜ地方が必要なのか僕には分かりません、と私に訴えてきました。これだけ人口が一気に減って高齢者が増えていくと、この国難を乗り越えるためには、多くの人が都市に住んで働いた方が財政的にも雇用的にも合理的に考えて良いはずだと。では一次産業はどうするのか、食べ物はどうするのか、と尋ねると、比較優位の原則があるので、日本が苦手な事はアジアに任せて得意なことをやればいいじゃないか、と言います。彼には全く悪気はなく、ものすごくまっすぐな目で私に訴えてきました。そして彼のような人は残念ながら特別ではないのです。

今、日立と京都大学が共同で日本の未来をシミュレーションして、この15年以内に日本は2つの政策的な選択を迫られる時が来るという結果が出ています。1つは先程の大学生が言ったような道です。もう1つは財政的とか雇用的とかではなくて、人間の幸福だとかあるいは健康寿命を伸ばすだとか、そういうことを重視していく小規模分散の道です。このどちらかを私たちは選択しなければならぬのです。心配なのは、東京にいると経済人や政治家の中に、さっき言った大学生のような考え方を、はっきり口にしないけれど、喉まで出かかっている人がすごく増えている気がしてなりません。

三陸には防潮堤を作っています。高さ15メートル幅80メートルのコンクリートの壁です。国土強靱化計画

をやっていますけれども、コンクリートでこの国を囲いますか。山は今、どこに行っても獣害の話です。山に壁を作って、海にも壁を作って、そうしてみんな都市の中に来て、まるで動物園の檻の中にいるみたいにする。これではいくらお金があってもキリがないです。

南海トラフが来たらこうなるという被害予測があって、津波が来るのを分かっている、なぜこんなに太平洋側に大きな都市をたくさんつくったのだらうって不思議に思いませんか。答えは皆さんお分かりのとおり経済です。海に近い太平洋工業ベルト地域を作って農村漁村を合理化し、工業的に発展し、それで日本は経済大国になりました。目先のことだけ考えたら成功だったと思います。でも津波っていうのは地球があくびしたようなものです。ところがそのあくびであれだけ大きな被害を出してしまったのは、三陸の街にも近代建造物がたくさんできていたからです。昔のように津波が来ることを前提にまちづくりをしていたらリカバリーは早いのです。確か四国にも、四万十川に、流れることを前提に作っている橋がありますよね。あの発想です。ところが自然に対して徹底的に戦うという思想でまちづくりをしていくと防潮堤になるし、そういうものが破壊されるとリカバリーに金も時間もかかるのです。これからよく考えていかなければいけないと思います。

さっき私が紹介した、東京の私立大学の学生が言った地方は稼がないのだからいらんじゃないかという発想もそうですが、すべての基準が、儲かるか儲からないか、これしかなくなってしまっている。私は経済も資本主義も否定していませんが、これしか基準がないのかということをお願いしたいのです。

日本にはいろいろな問題がありますが、特に少子化は深刻です。2人目、3人目と産んだらいくら払うとか、いろいろ考えてやっていて、どれも間違いじゃないですが、私は決定的に何か足りないと思っています。都市化しても排除できなかった自然があります。それは赤ん坊です。赤ん坊は、育てた経験のある皆さんはお分かりだと思いますが、自然そのものです。所構わずにおしっこやうんちをするし、親が大人の都合でいろいろな予定を立てても、それを無視するかのように病気になって大人があたふたするわけです。自然から離れてしまったので、自然との付き合い方が分からなくなってしまったのです。

だから1人産むとこんな大変なことはもういいとなるわけです。

私が親しくさせていただいている養老孟司さんは、少子化の原因はやはり自然との付き合いを分からなくなってしまったことだと言っています。私は幸い、子供の頃からいつも山の中に連れていかれて、きのこ採りだ、山菜採りだ、スキーだとやっていました。私の子供は今3歳ですけれども、子供が1歳半の時に息子を抱っこ紐で仙台まで連れて行って、そのまま息子を抱えながら質疑応答も含めて3時間講演したことがありました。2歳の時には生産現場に連れて行こうと思って、母親から離して息子と一緒に酪農の現場に行って2泊3日過ごしました。大それたことをしたつもりはなかったのですが、1歳2歳で母親から離して2人で1日とか、ましてや2泊3日なんてありえないとみんなに驚かれました。私は月に2回しか帰らないようなダメ親父ですけども、息子と2人きりになるのが怖くない、それは私が幼少期から自然の中に入る機会が多かったからかなと思っています。

## 5. 都市と地方をかきまぜる

### (1) 生きるということ

東日本大震災の話に戻りますが、私がこういう取組みを始めたきっかけは、7年前に尽きます。私も被災地に行き、一生懸命支援活動をやっていました。愛媛の皆様にもたくさんご支援頂いて本当にありがたかったです。東京からもいろいろな人がたくさん来ました。がれきの撤去もあるし、泥の掻き出しもあるし、あるいは心を病んでしまった方々の話を聞く心のケアもあり、いろいろなことで都市部の方にもお世話になりましたが、ある時気付いたのです。助けに来たはずの都市住民の人々の中に、被災地で逆に助けられて元気になって都会に帰っていく人がたくさんいたのです。それは、1つには、夥しい生と死があって、その世界から最も離れた東京の人たちにとって、被災地というのは生と死が陸続きになっていたのです。そして人生には締切があるということに気付いた人たちが多かったのです。スティーブ・ジョブズというiPhoneを作った人が、毎朝鏡の前で、今日自分が死ぬとしたら、本当に今日自分がやりたいことはこれなのか、ということをお問自答したらいいのですけど、多分そういうことだと思うんですね。岩手県の被災者の

多くは後悔していることがある。それは、みんな生き別れた息子や旦那や奥さん、親父と最後玄関先でつまらないことで喧嘩して別れているのです。また会えると思っているから、明日が必ず来ると思っているから、些細なことで喧嘩しているのです。さよならが言えなかったのです。ありがとうって言えなかったのです。だから、明日が必ず来るとは限らないというような人生観、死生観の転換というのは少なからずありました。そこに都市の人も触れたのです。

もう1つは死と共に生です。生きるということです。食べ物の裏側を見たのです。たくさんの人が、生まれて初めて本物の漁師や農家に会ったと言っていました。毎日、スーパーに行けば美味しい魚介類があって食べていたけれども、それを獲ったり育てている人に会ったことがないのです。ところが被災地に来たら、初めて食べ物の裏側を見て、漁場を見て船にも乗せてもらったりして、魚を獲るといのはこういうことか、ホタテ育てるのはこういうことかということが分かったのです。人間がコントロールできない自然に働きかけて命の糧を得ている人たちの暮らしや考え方や生き様、そういうものに触れたのです。

岩手県は伝統芸能の宝庫です。そのルーツの多くは生産現場で、いくら頑張っても最後は天に手を合わせないといけない、五穀豊穡をお祈りしないといけないわけです。そこが起源になって地域で何百年も受け継がれてきた伝統芸能があるのです。この世界観にも都会の人は触れるわけです。消費者庁のアンケートの結果なのですが、意外なことに、この10年で非合理的な世界を信じるという人の割合が増えているのです。これは合理的な世界を拒否するというのではなくて、そこだけでは埋められないものがあるから、そうじゃない世界があってもいいと考えている人たちが増えているのです。そういう人たちが被災地に来た時に、自分と自然、自分と他人、自分と地域社会、自分と過去との関係性、繋がりのおかげで人々の暮らしが成り立っている、そういう世界がまだ残っているわけです。その時に、食べるということか、大きな食物連鎖の中に自分の命すらあるのだということに気付いたのです。

私は今でも記憶に残っているのですが、一緒に漁船に乗った東京の外資系企業に勤めるOLがいました。アナ

ゴが食べたいというから、漁師はじゃあアナゴ獲りに行くべと。仕掛けをして次の日行ったらアナゴが入っていて、騒ぐOLに漁師が自分で捌いてみろと言って包丁を渡したのです。まず漁師が暴れるアナゴの目玉を刺して固定すると、アナゴは痛がってのたうちまわります。漁師が「早くさばけ」と言うと、そのOLは左手でしっぽを掴んで、しばらくためらっていましたが、最終的に目を背けながら、「ごめんね」と言って捌いていました。そうしたら、はらわたや内臓と前日自分がこのアナゴを食べるために仕掛けたエサのイワシが、腹から出てくるわけです。それはもうゴミだから捨てちまくなって漁師から言われて、彼女はわしづかみにして海に捨てました。そうすると今度はそれを食べに他の魚や海鳥がきて食い散らかしているわけです。それを見て彼女は、小学校の時に勉強した食物連鎖を思い出したって言うのです。忘れてた、都会にいと気づかない生きる実感が湧いたって彼女は言ったのです。死だけではなく、生きるというのは何かを思い出したと。

また、福島県の相馬、原発事故のあったところですけど、今、日本で一番農業をやるには条件の悪いところに、あえてそこで農業をやるんだと東京から帰った若者がいます。彼の所には去年の11月に取材に行きました。彼は体験農業を受け入れています。週末だけ都会から体験農業に来た人たちが書いた絵日記があるのですが、その中で一番印象に残ったのは、横浜から来たIT企業に勤めている20代の女性が書いたものです。ここに来たら、生きるってそんなに難しくないことに気付いた、どんなことがあっても日は暮れるし、どんなことがあっても日はまた昇る、生きるってこういうことでもいいのじゃないか、と書いていました。つまり彼女は都会にいた時は、生きることは難しいと思っていたと告白しているわけです。では彼女が体験した暮らしは何かというと、1日の大半を自分が生きるために必要な食べ物を作ることに体を動かしたことです。そして、お腹が減って食べ物を食べる、生きるってこういうことかと。命を生み出す現場から離れたところにいる人ほど、生きるってどうしたことだろうかと頭で考え悩んでいます。でも生きることの答えは頭で考えても出ないと思います。田舎に来て、体で1日体験したら体で分かることなのです。

ちなみに今、都会の人は、走るのが大好きで大勢ジム

で走っています。夕方山手線の車窓から眺めると、あちこちのビルの2階あたりで、わざわざガラス張りにして、みんなに見せるかのように一生懸命走っているのが見えます。そこには月何万円も払っています。私の回りにもそういう人達がいて、話を聞いて分かったのは、走れば息も切れるし汗もかいてお腹もすきますが、この生きるっていうことを感じられなくなっているのです。人間は頭と体の均衡がとれるところがあって、そこが崩れると生き物として壊れていきます。そういう人が、ジムにいて走ってバランスをとっているのです。しかし、ジムに月何万円も払うお金があったら、少し足を延ばせば、今、日本中に耕作放棄地が広がっています。1日鍬持って汗流したら、カロリーも消費してダイエットにもなるし、お腹もすくし、やがて自分が関わってできた野菜やお米が届いて食べたら感動もひとしおでしょう。その方がよほど生産性が高いと思いませんか。実際、東京の大手企業の社員研修で、社員を耕作放棄地に連れて行って開墾し始めているところが増えています。一昔前はCSRとか社会貢献とかで語られていましたが、今は企業防衛だといいます。5年選手10年選手の中に頭だけ使って身体性を失って壊れていく人たちがいる中で、そういうところに時々連れて行くということをやっているのです。

## (2) グラウンドに降りる

漁師と農家がやっているのはスモールサイエンスです。観察し、規則を見出し、それを検証し、仮説を立て検証することを繰り返す小さな科学です。自分を取り巻く環境に主体的に参加しているのです。しかし都会の人は、自分を取り巻く環境に主体的に参加する人はほとんどいないのです。生活のいろいろな課題は解決してくれるサービスがあり、全部お金で買えるのです。だから楽で快適です。だけど自分が人生の主役の座に座っているという感覚がないのです。ところが田舎に来たら、自分を取り巻く環境に主体的に参加していかないと成り立たないのです。私がスモールサイエンスに対してビックサイエンスって言っている、原子力やあるいは遺伝子工学、そういう私たちの手から離れた専門家の大きな科学が幸せにしてくれると信じて依存してきたのです。けれども、いったん原発事故が起きればこの通りじゃないですか。

依存するのではなくて、自分の暮らしは、自分が知恵を絞って、体を動かして良くしていくんだという人たちが、農家と漁師にはたくさんいるわけです。

私は、日本は観客民主主義だと言っています。みんな観客席の上に座って高みの見物して文句を言っているだけです。今まで家庭や地域の中でやっていたことを、どんどん行政や民間にアウトソースしていったのです。その結果、年を取った時に自分を必要としてくれる人はいません。一日中テレビを見ているだけですから、立てなくなるのもボケるのも早くなります。日本はどんどん人口が減って、役所の職員も減っていきます。その時に、今まで役所がやっていたことをなんで俺達がやらなきゃいけないんだとすぐみなさん怒りますが、私は、そうじゃなくて、グラウンドに降りて一緒にやるんだと言っています。生産する側が弱ると、最終的にブーメランのように跳ね返ってきて、観客席にいる人が困るのです。だったらグラウンドに降りるしかないのです。いきなりピッチャーマウンドに行かなくてもいいです。片足だけファールグラウンドに降りることだったらできるっていう人はいるはずですよ。

地方にもいろいろな問題があるので、そこに都市の人が行くと楽しいわけです。東京にいる時は3億円のプロジェクトを動かしていたけれど、エンドユーザーの顔が見えないので何のために働いているのかよく分からなかった。だけど、被災地に来たら、目の前に困っているおばあちゃんがいる、自分が都会で培ってきたノウハウとスキルとネットワークを活かして、このおばあちゃんの課題を解決してあげることができる。おばあちゃん、お前がいてくれてよかったと手を握ってくれるわけです。ここに貨幣のやり取りはないのだけれども、都会で埋められなかったものが埋まったわけです。都会の人にも被災地に助けられ生きるスイッチをオンにして帰った人が非常に多かったのを見て、私はこれを震災の時だけではなく日常からやりたい、都市と地方の人たちは支え合ったらもっといいんじゃないかと思ったわけです。

## (3) 食べる通信

都市と地方のどちらが豊かかという二項対立の議論を日本はこれまでやってきたのです。私もそうでした。18才で東京に出て行った時は田舎はだめだと思い、29

才で岩手に引っ込んだときは、都会は人が住むところじゃないと言っていました。でもそうではなくて、どちらにも強みと弱みがあります。実際、東京と大阪にこれだけ人が集まったのは仕事だけじゃないと思います。地方の風通しの悪い閉鎖的な環境を脱出たくて、息苦しくて出て行ったのです。このことも考えなきゃいけないと思います。私は地方を手放しで礼賛はしません。それぞれの強みでそれぞれの弱みを補える関係を都市と地方で作れるはずだと思って「東北食べる通信」を始めたのです。

「食べる通信」1月号の特集は赤藻屑<sup>あかもく</sup>という海藻でした（図2）。これはジャマモクとか言われ、海に浮いたり、船のスクリューに絡まるゴミだったんです。だけどこれも資源で、栄養もあるということで取り上げています。漁師の物語に赤藻屑をつけてセットで送るのです。届いて、読んで食べると、まるで現場に来たような感覚を味わえるわけです。被災地は風化していています。3年目ぐらいから一気にボランティアが来なくなりました。だったら日常から生産者と消費者がつながっていたら風化なんか恐れるに足らない、これでとにかく繋がってもらいたいと思いました。読んで食べると、おいしくなります。魔法がかかるのです。みなさんも経験あると思いますが、同じ食べ物でも、食べ物の裏側の生産者を知って食べるのと、そうでないのとでは、おいしさ

は全然違います。おいしさってどこで感じますか、舌だけですか。最終的には頭で情報処理されますから頭で感じる部分も大きいのです。

宮城県の仙台空港の近くで豚を育てていた女性がいました。ヨーロッパのアニマルウェルフェア（動物福祉）の概念を取り入れています。動物だって人間と同じようにストレスのない環境で、満員電車のようなところじゃなくて平飼いにして健康に育てた方が、結局、食べた人間も健康になるという考えです。ところが震災で流された。奇跡的に助かった豚4頭で再生すると言って、そこからまた始めたのです。話を聞きに行ったら、豚に落語を聞かせているのです。クラシックも聞かせているのです。その理由はアニマルウェルフェアです。落語やクラシックを聴かせた豚というのは、ストレスフリーになれるのだという彼女なりの信念があるわけです。もしスーパーに、落語を聞いて育った豚というラベルの貼ってある豚肉を売っていて、その隣に、200円安い普通の豚肉を売っていたら、どちらを買いますか。200円高い豚を買う人はいますか。でも私が今説明したストーリーを買い手が知ったら、200円高いけれどもその価値があるよねと言って手に取る人は出てくるはずなのです。

「食べる通信」で食材と一緒に商品を届け、この人の、この農家、漁師の物語に共感して食べてみたいなど思った人がいれば、フェイスブックのグループページで双方が繋がるようにしました。特集した生産者と1,000人の読者を直接繋いだらコミュニケーションが始まったのです。両方ともコミュニケーションに飢えていたのです。生産者はこれまでどんなに努力して工夫して作っても、出荷したらこの誰が食べてくれているのか分からない。そういう状況だったのが、「こんな風に息子と料理して食べました」「息子がトマト食べられないって言うのに食べられるようになった」「こんなおいしい海苔食べたの初めてだ、その工夫も知って感動した」などと写真付きで投稿が来たわけです。消費者の皆さんがごちそうさまとお礼を言い始めたのです。生産者もうれしいわけですよ、作り手冥利に尽きるわけです。

そうして、ネット上で交流してもらって、最終的には生産者を東京に呼んで交流会をすると、会いたい人たちがやってきます。それで、本人を目の前にして、本人と杯を交わして、本人の話を聞いてしゃべって飲んで



図2

と、現場に行きたくなる。現場に行って、一緒に波に揺られて、土いじって、出荷の手伝いをしたり、いろんな草とりの手伝いをして、一晩酒を飲んで泊まったら、もう関係性ができるわけです。そうして次の年も行く、次の年も行くということを繰り返して、「関係人口」になっていきました。

## 6. 関係人口が創る新しい地域社会

### (1) 都市と地方を個でつなぐ

消費というのは、費やして消すって書きます。刹那的なのです。消費者はみんな浮気性だから、1円でも安いものが見つければすぐそっちへ行く。こんなことやっていたら、いいものを作る人がいなくなるのは当たり前じゃないですか。消費だけじゃだめで、1回きりじゃなくて、この人はいいもの作っているなって、その人の人柄と生産の中身に共感して関係を作って継続して買って行く、こういう消費活動にしていきたいと私は思っています。今農業も、大規模農業を政府が支援して、外国に打って出る強い農業にするといっています。多くの人に安定的に食料を供給していくという意味ではこういう農業もなくてはならないと思います。ただそれだけでいいのか、小規模、中規模農家はどうするんだということなんです。地域の自然にあって繋いできた種、在来種の野菜なんかもありましたが、全国で壊滅寸前です。そういうものは大量生産できませんから、みんなが金にならないとやめていったのです。だったら金になるような経済にすればいいじゃないですか。それはマーケットじゃないと思います。直接の関係性だったり、コミュニティにして、その価値を認めた人たちが買っていけるような時代です。もはやスマートフォンもあるし、自分で情報発信して、自分の情報の価値に共感してくれるファンを増やせる時代になったんです。

そういう風にしていきたいと思って私はやってきましたが、5年やってきてどうだったかということ、紹介した生産者のところに全部「関係人口」ができたわけではありません。だいたい55人紹介して半分ぐらいです。会津若松では、今でもコミュニティができています。収穫するまでに4年かかる薬用人参を育てる人がいて、彼はくじけそうになったんですけど、毎年みんな手伝いに行くわけです。去年ちょうど収穫やりましたけれども、都

会の人達と喜びも悲しみも分かち合うんです。

「東北食べる通信」の読者も結構やめていきます。卒業するっていう人もいます。なんで卒業するのかって聞いたら、たくさんの生産者を紹介され、東北に3人の仲のいい農家と漁師ができて家族ぐるみの付き合いをしているので、私達は今後この人たちを応援していきます。これ以上たくさんの人を紹介されても、たくさんの人と深く付き合えませんかということなんです。何をやっているかということ、盛んに産地に行くし、生産者が東京の催事に来たときは、売り子になって手伝ったり、友達呼んで、口コミで広げたりしているわけです。自分でもう商品の価値を説明できますから、販路が拡大していくのです。そして、最終的に彼女はこう言ったんです。この人に会津で作り続けてもらわないと東京でなにかあった時に逃げ込む先が無くなる。東京で首都直下地震が起きて行くところなかったらいつでも来いと言ってくれる。食べ物はいくらでもあるし空き家もいくらでもあるから行政にかけあってやると。彼女は、生産者のためではなく自分のために支援しているんです。こういう関係を都市と地方の間で僕は作っていきたくらいなと思っています。

今、生産者さんはお客様のことを「様」ってみんな言いますよね。買ってくれるわけですから圧倒的に消費者の方がえらいのです。でも五分の関係であるべきです。生産者は買ってくれる人がいないと生きていけない、消費者はいくらお金があっても食べ物を作ってくれる人がいないと生きていけない。だから、私は支援という言葉があまり好きではありません。支援する側は口には出さないけれども、かわいそうな人たちだから助けてあげるという上から目線だし、支援を受けるほうも、人間一方的に与えられ続けていると卑屈になってきます。私は支援じゃなくて連帯、お互いの強みでお互いの弱みを補い合う関係だったらいいと思うのです。そして、生産者と消費者が上下関係だと言いましたが、この上下関係がそのまま都市と地方の上下関係になっていると思うのです。物差しは1つじゃないはずなんです。お互いのことをまず知って理解し合う、そうしたらお互いを敬いあって尊敬し合う関係になるはずなんです。田舎と東京で生み出す価値の世界はまったく異質なんです。同じ土俵で比べること自体がおかしいのです。6次化、ブランド化したら今より収入が倍になるかもしれません。だけど、左から右

に数字を動かして、無限に稼いでいる人たちに追いつけますか。今の市場を通したら、そういう差が出てしまいます。だったらマーケットを通さないやり方を考えたらいいのです。

1つ参考までに具体的な事例をお話ししますと、この「東北食べる通信」のデザイナーは時給が高いのです。この人、1時間手を動かすと数万円稼ぐのです。彼と一緒に秋田県の潟上っていう農家のところに取材に行きました。その農家はふゆみず田んぼと言う独特の農法で、人間と自然に優しい農法で米を作っている、すごい世界観で食べ物を作っているのです。そこで、このデザイナーはその農家の世界観に惚れてしまい、その農家も彼のデザインに惚れてしまった。東北食べる通信の取材だったのですが、それとは別にその農家は、うちの農場のチラシをデザインしてほしいって言ったのです。そしたらこのデザイナーは、対価は米でいいって言って引き受けて取引は成立したのです。私はこのことの意味は大きいとっていて、その農家が市場を通じて、つまりこのデザイナーと知り合いじゃなくて、このデザイナーの事務所に依頼したら、その農家は何日外で働かなければならないか。それが相対になってそれぞれの世界を理解しあうと、市場価値のコストの10分の1で成立するのです。手間はかかるけれど、丁寧に時間をかけて、都市と地方の人は、やっぱり個と個でつながっていくことをしていってほしいと思うのです。

## (2) 都市と地方の対等な関係

今、ふるさと難民がものすごい勢いで増えています。帰省するふるさとがない人達です。東京生まれの東京育ちです。この人たちに、マンションはふるさと難民キャンプだって言っているんです。帰省とかいいなって憧れているから、だったら作ればいいと言っています。私のふるさとの定義は2つあって、1つは生まれ故郷です。爺ちゃん婆ちゃんがいるところです。でももっと深いふるさとがあると思っていて、それは海と土です。人間としてのふるさととともに、生き物としてのふるさとがあるはずです。そのふるさとからみんな離れてしまって、今、ふるさと難民になっている。私のふるさととは岩手ですが、昔の岩手県の知事が衝撃的なレポートを書きました。消滅の可能性のある自治体と色付けされているのを

みると、秋田県は真っ赤ですね、岩手もほとんど真っ赤で、北東北三県がものすごい勢いで人口減少、高齢化していて、被災地はそれにとどめを刺されました。四国も同じような問題に直面していると思います。

私は自然からこれ以上離れてはいけなく思っています。昔は参勤交代がありました。江戸時代は田舎の人が江戸に行って、いろんな文化に触れて、それを持ち帰って地域を元気にしていました。養老孟司さんとともに逆参勤交代と言っているのですが、都市生活者が一定期間海や土に触れに行く、そうして心身ともに健康になって都会に帰っていく。未だ科学で解明できない自然の中に身を置いて、心身ともに健康になって都会に戻った方が、いろんなアイデアも出てきます。都市と地方がともに健康で元気になるようにしなければならない。

日本は人生100年時代を迎えるといえます。100年生きるのは長くて結構大変ですよ。今のまま人生100年になったら、最後の30年は介護施設と病院です。これは本人にとっても支える家族にとっても地獄だし、そもそも社会がこのコストに耐えられない。いかに健康寿命を延ばしていくか。そのためには、医食同源って言葉があるじゃないですか。食べ物は薬です。お医者さんに払うお金を農家や漁師に払っていくような世の中にしませんか。体が悪くなってから、病院だ、薬だ、手術しろというのはネガティブコストです。これに対して、日ごろから頑張っている顔の見える生産者のものを100円200円高くても買う、これはポジティブコストです。そのほうが健康寿命は長いのです。最後に自分が慣れ親しんだ家や地域で生涯を閉じられる、こんな良いことはないと思います。

医食同源の国づくり、社会づくりというのは、都市と地方がお互いを敬いあうような関係を作ることです。現実的に岩手県も、四国と同じ大きさです。四国は4つでそれぞれ県庁もあって予算もあって空港もあるわけですが、岩手県はこの大きさを1つでやっているのです。県立病院も県立高校も日本で1番多かったから、人口減少の波に真っ先にぶつかりました。全部統廃合です。これにどう対応していくか。

すべての集落は残らないと思います。また、残ることを望んでいない地域の人たちもいます。実際、都会の生き方をいろいろたくさん入れて、生き方変えられて、結

局みんな出て行ってしまった集落もあります。そういう集落に関しては、今のままだと何も残らないので、自然とどう付き合ってきたのか、自然の際で生きている人たちの知恵をちゃんと記録して残さなければいけないと思います。一方で、これからも残っていくんだという意味のある集落もたくさんあります。そうなると最終的に学校をどうするか、病院はどうするか、という問題があります。これは今日全体的にお話ししてきたことに繋がりますけれども、今ある制度と仕組みと価値観の中で頭を捻って考えてもなかなか到達できない難しい問題だと思います。1つのヒントは、学校がなくなる、あるいは縮小してしまうと、お母さんはこんなところで子育てしたくないから町に出る、お父さんももれなくついていく。学校がなくなるって大変じゃないですか。だったら自分たちで学校をやるというところが出始めています。公教育じゃなくて、私塾だと言って、特色ある教育を自分たちでやるんだと言っているところ、準備しているところがあちこちで耳に入ってきます。最終的にグラウンドに降りるしかないのです。

## 7. おわりに

「食べる通信」は台湾と韓国と中国にも広がっています(図3)。去年それぞれの国に行ってきましたが、言葉は違うけど、聞く話はみんな同じでした。韓国は国策として1次産業を切り捨てたので、日本以上に農村、漁村は深刻です。都会にたくさん若い人が集まって、しかも生きにくさが増しています。その解決のヒントとなるというので、食べる通信が台湾など5か所で始まってい

## 台湾・韓国・中国での展開

高橋博之著『だから、僕は農家をスターにする「食べる通信」の挑戦』が台湾・韓国語で翻訳出版され、講演やノウハウの提供など交流を活発に行っている他、台湾では台湾版食べる通信の創刊にむけ、数団体が始動しています。台湾では日本以上の熱気をもって注目を集めています。

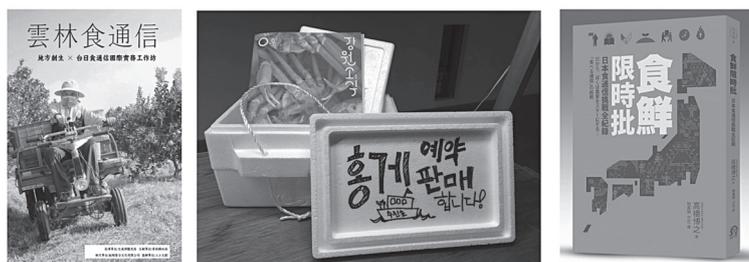


図3

ます。アジアもヨーロッパもアメリカも高齢化して、都市と地方の格差が広がっていきます。東アジアは急速に近代化、西洋化したから深刻なのです。地方を置いてきぼりにして都会が大きくなったので、短い期間で成長した副作用です。日本は課題先進国で、なおかつ日本の中の課題先進地は東北であり四国です。昔は、目の前を走っている西洋の背中を追いかけて、追いつけばよかったのですが、追い越して先頭にいるのです。これからは、自分たちでアジアや世界に、生き方、社会の在り方を示していく素晴らしいチャンスだと思っています。私も東北を中心に頑張っていきます。「都市と地方をかきまぜる」をテーマに、今日は「関係人口」についてお話ししました。是非皆さんともこれから縁を深めて、都会と繋がるだけでなく、地域と地域が繋がっていくことにも十分におもしろい可能性を秘めていると思います。ありがとうございました。

【平成30年1月27日(土) 於：えひめ共済会館】

## Profile 高橋 博之(たかはし ひろゆき)

一般社団法人 日本食べる通信リーグ・代表理事  
特定非営利活動法人 東北開墾・代表理事  
株式会社ポケットマルシェ・代表取締役

1974年、岩手県花巻市生まれ。2006年、岩手県議会議員補欠選挙に無所属で立候補、初当選。2期6年をつとめる。2011年の震災後、事業家へ転身。「世なおしは、食なおし。」のコンセプトのもと、2013年に特定非営利活動法人「東北開墾」を立ち上げ、史上初の食べ物つき情報誌『東北食べる通信』を創刊。その後一般社団法人「日本食べる通信」を創設し食べる通信を全国へ展開。すでに30以上の「食べる通信」が各地に誕生している。2016年には生産者と消費者を直接結びつけるサービス「ポケットマルシェ」をリリース。生産者と消費者が結びついた強い一次産業を目指している。

著書：『だから、ぼくは農家をスターにする「食べる通信」の挑戦』

『都市と地方をかきまぜる — 「食べる通信」の奇跡』